# イースター

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イースター

【Ｎコード】
Ｎ１９２８ＢＡ

【作者名】
シン

【あらすじ】
父、十六夜秀隆（いざよいひでたか）の謎の失踪により、わずか十九歳で日本屈指の大財閥、十六夜グループの総帥となった司（つかさ）は、幼い日から彼の主治医として側にいるドクター・刃（レン）と共に、十六夜秀隆失踪についての謎を探る。
だが、司が二十歳になるまでの後見人たる兄、柊（ひいらぎ）の策謀により、司は、英国貴族、ウォリック伯爵の子息、クリストファーと政略結婚させられる。金の欲しい伯爵家と、社交界での身分の欲しい成り上がり財閥の縁組だ。

盲目のために、グループを継ぐことが出来なかった柊の狙いは……。

司はクリスとの結婚を撥ね付けるが、それも、柊の策謀を知ってのことではなく、司自身が持つ秘密のためだった。

今から一六〇年前、有害宇宙線により発生した新種の癌が人々を襲い、染色体〈ＸＸ〉から成り立つ女は絶滅し、司はこの世に存在している唯一の《女》であった。もちろん、一六〇年前、女が生存していた頃から性転換する男は珍しくはなく、今の世にも性転換して女の姿を持つ者は珍しくなかったが、性転換しても、彼らの染色体は〈ＸＹ〉であり、〈ＸＸ〉ではあり得ない。

司は一体、何者なのか、そして、司の側にいる男、ドクター・刄とは何者なのか。失踪した十六夜秀隆は何をしていたのか、柊の口から零れた《イースター》とは何を意味する言葉なのか。謎ばかりが増え続ける……。

## Ｅａｓｔｅｒ　？－１（前書き）

男装の麗人に憧れます。
子供のころに見た『リボンの騎士』のサファイヤ王子（王女）や、
『ベルサイユのばら』のオスカル。
彼らの美しく、潔い姿は、とても印象的でした。

※残酷表現や、性描写があります。苦手な方はご注意ください。

## Easter ?—1

「ごらん、司。この雄大で繊細な美しい地を。見渡す限りのグレーシャー・ブルー……。おまえには、世界中の美しいものを見せてやろう。いつか、おまえがその名の通り、全てを司る者となる時のために……」

翠とも、碧とも言えない神秘的な色合いを含む、氷河藍——。

解けることのない万年雪や氷は、人の知る色では決して表現できない透明感を持っている。信じられないスケールのグレーシャー・ブルーは、それを見つめる幼子の射干玉の瞳に、力強い父親の声と共に焼き付いた。

「夜には極光を見せてやろう。地球の両極の夜空を舞う光の帯だ。太陽の爆発によって起こる太陽風が、地球の磁場を通る時に放電し、大気層にぶつかって生じる現象だというが、私は今でも暁の女神が夜に架ける虹であると信じている。——おかしいか？」

はにかむような父の表情に、司は小さな手で、大きな手を握り返した。

暖かい眼差しが、返って来る。

「今、この地球上で最も神秘の名に相応しいのはおまえだ、司」

「……ぼく？」

「ああ。自然は人々に美しいものを見せてくれる。だが、時には人を嘲笑うかのように、恰も神の如く、試練を与える。——何故？人間の愚かさを見兼ねてのことなのか、それが神々の決まり事なのか……。一五〇年前、有害宇宙線により、ＤＮＡに障害を受けた〈ＸＸ〉が絶滅してしまったように——。毎日降り注ぐ紫外線や、毎夜降り注ぐ宇宙線が、人間の作り出した突然変誘発異物質と結び付き、ＤＮＡに突然変異を起こさせ、新種の癌を発生させてしまったように——。神々がその銀色の指先を翳す度に、この世の神秘が消えて行く……。私はその神秘を取り戻したいのだ、司。消えて行く

美しいものを、神々の手から取り返すことこそ、私が――十六夜が護(まも)って来た《イースター》だ。そして、おまえはそれを司る……。その存在自体が神秘である、おまえが……」
極北の地を飾るグレーシャー・ブルーは、人々に夢を見せる秘境であった……。

木洩れ日の落ちる湖が、ある。
白い光が緑の葉を黄金色に染め変え、澄んだ湖面に、きらきら、とした模様を創る。
吹き抜ける風に、湖面が、揺らめく。
イングランド北西部のカンブリア地方――。
標高約九八〇メートルのスコーフェル山を取り巻く湖水地方は、十余の湖を持ち、山間には五〇〇以上の湖沼を持つ、という。
湖水の色も深く、自然の美しさを織り成すその湖岸に、白い精霊が微睡(まどろ)んで、いた。――いや、白いのは肢体だ。何も身につけていない裸体、であった。木洩れ日に溶けるしなやかな肢体は、まだ華奢なそのラインを、より幻想的に、より清らかなものとして、映して、いる。
額にかかる煩わしげな黒髪も、濃い陰をとす長い睫も、神秘を司る神々の如く、艶やかな輝きに、満ちて、いる。
スラリと伸びる手足は眩しく、柔らかく膨らんだ乳房は初々しく……。
無防備に、そして、自然に溶け込んで眠るその姿は、ケルトの神話に出て来る精霊(シィ)のようでもあっただろうか。
「司様！　どこですか、司様！」
微睡みの中、湖を取り囲む森の向こうから、樹木の合間を縫って、声が届いた。誰が聞いても、捜し回っている、としか思えない呼び

声である。そして、それは、普段は寡黙な男の呼び声であった。
「ん……」
司は白い肢体をけだるげにくねらせ、二、三度瞬いてから、瞳を、開いた。
白い光が、眩しく、差し込む。
手を翳し、静かな夜の湖をはめ込んだような黒い瞳に、陰を、作る。
十六夜司――。湖岸に裸体を預けるその精霊は、わずか十九歳という幼さでありながら、日本屈指の巨大コンツェルン、十六夜グループの総帥として立つ《少年》であった。
彼が持つ神秘的な美貌と、不思議な色香は、神々の寵愛によるものだっただろう。

## Easter ?—2

「司様っ！」

樹木の合間を抜けて、湖を臨む森の切れ目に、一人の男が窘めるような言葉を放って、姿を見せた。三七、八歳だろうか。怜悧な面貌に相応しい、鷹のような瞳をしている。その長身も、鍛え抜かれた体躯も、どこか得体の知れない影を秘め、ただ者ではない雰囲気を作り出している。

彼は、ドクター・刃（レン）、とだけ呼ばれていた。司の主治医として、十年近い歳月を、片時も離れず過ごしている。

「司様！　またそんな格好で——っ」

裸で湖岸に寝そべる司を見つけ、咎めるように声を粗げる。それから、周りに散らばる司の服を広い集め、露な肌を覆い隠す。

「こんな森の奥まで、誰も入って来やしないさ。——何か用か、ドク？」

シャツの袖に腕を通しながら、堪えてもいない様子で、司は言った。

「お兄様がお見えです」

刃（レン）は言った。

「柊（ひいらぎ）が？　へェ。あの人がぼくに逢いに来るなんて珍しい。しかも、英国のこんな田舎まで」

「随分、お怒りのご様子でしたが」

「……。ウォリック伯のパーティに行かなかった理由なら、もう話したさ」

「承知しています……」

少し瞳を細め、それでも淡々とした口調で、刃（レン）は言った。司の手に、胸の膨らみを隠すための伸縮性のあるコルセットを渡し、服についた草を払う。

初夏——。

新緑に覆われ、花々が開花するこの季節は、イギリスのカントリー・サイドが最も美しく輝く時期だ。
湖を渡る風も、心地良い。
「……お父さまの夢を見ていた」
ボトムとシャツを整え、湖を後にして、司は言った。森の樹木が零したような呟きでも、あった。
「十六夜　翁(おう)の？」
「ああ。アラスカへ連れて行ってもらった時の夢だ。一面のグレーシャー・ブルーと、夜に架かるオーロラの……」
ザワ、っと風が、樹木を鳴らした。
刃(レン)は、何も言わず、ただ暖かく瞳を細めて、隣を歩いていた。
「お父さまが何をしようとなさっていたのか……解るか、ドク？」
小さな顎を持ち上げ、司は訊いた。
「いえ……。私はただ、あなたをお護りするよう、言い付かっているだけですので」
「そう……」
二人は、それから無言で、森の向こうへと足を進めた。
司の父、十六夜秀隆が突然、姿を消してから、一年――。一向に消息が判らないことも含めて、十六夜の親族やグループのお偉方は、やれ親族会議だ、やれ緊急会議だ、と騒ぎ立て、結局、十九歳の司が十六夜グループの総帥として立つことになり、兄の柊は、司が二十歳になるまで、その後見人として立つことが決まった。誰もが、十六夜秀隆の行方を捜すことを半ば諦め、十六夜のグループと財産を守ることを優先したのだ。

森を抜けると、パァ、と突然、視界が開け、目の前に、見事な庭の中に佇む、優雅な城が現れた。
荘園屋敷(マナー・ハウス)の性格を深く留めるその城は、自然の風景をそのまま取

り入れることに重点を置き、古き良き時代の面影を偲ばせるように、静かな佇まいで、そこに、あった。
陽光の降り注ぐ庭を抜け、二人は、その城へと身を沈めた。
「早く部屋へ戻られて着替えを――」
司のラフなスタイル――しかも、草や泥の付いたその格好を見下ろし、刃(レン)が言いかけた時であった。
「その時間を待つ気もなさそうだ」
ホールの正面の階段を見上げ、司が言った。
絨毯を敷き詰める階段の上には、車椅子に腰掛ける三十代半ばの男が、いた。濃い色のサングラスを掛け、一目で高級と知れるスーツを身につけている。薄い唇は、その手に持つ鞭と共に、彼の冷酷さを表すものでもあっただろうか。
両端には、ボディ・ガードらしき屈強な男が二人、ダーク・スーツに身を包んで立っている。

## Easter ?—3

「相変わらず、変声期も迎えていない少年のような声だな」
車椅子に掛ける男が、言った。
司は何も言わずに、無言で男を見据え返した。睨みつけるような視線ではなく、もう慣れた厭味を聞くような視線である。
「わざわざ着替えに行く必要はない。どうせ、目の見えない私との話だ」
鼻を鳴らしてのその言葉は、多分、自嘲ではなかっただろう。
目が見えない、という言葉の通り、サングラスを掛ける彼の瞳は、ただ正面を見つめるままで、動かない。司の視線と合うことも、なかった。
彼は、司の兄で、十六夜柊、と言った。
「お久しぶりです、お兄さま。ぼくが上に上がりましょうか？　それとも、あなたが下に？」
広幅の長い階段を挟み、司は、車椅子に腰掛ける男——柊へと、皮肉な視線を持ち上げた。
柊の表情が、きつく、変わった。
「妾の子の分際で、大層な口を利くものだ。——まあ、父にしても、息子が目の見えない私一人では、後継者に不安を感じていただろうからな」
「……」
「早く上がって来い。おまえの後見人として話がある」
柊が言うと、ボディ・ガードたちが車椅子を押し、奥の部屋へと翻った。
十六夜秀隆の長子であり、司の兄である柊は、目が不自由なこともあって、グループの総帥として立つことはなかったが、取締役の一人として、そして、司の後見人として、グループの要所を押さえている。もちろん、目は見えなくともグループを率いる——支配す

る能力は充分に持ち、また、持っているだけに、司の存在は邪魔でしかなかっただろう。十五歳も年の離れた、まだほんの子供でしかない弟が、グループのトップに立ったのだ。
だが、司もまた、グループを率いる才覚を持った、十六夜秀隆の息子、であった。
「司様……」
刃(レン)が心配そうな視線を、向ける。
「パーティに行かなかった、というだけで、あれか」
肩を竦め、司は、刃(レン)の心配を脇に置いて、階段を上がった。
刃(レン)も後に続いて、足を進める。
マホガニー材の見事な細工の手摺りに沿って向かった部屋は、この城の中でも特に豪華　な客室(ゲストルーム)であった。奥にベッド・ルームを設け、バスもトイレも、全て一室に備えてある。この部屋だけで、日本の中層階級の家族四人が、充分に暮らせるスペースがあっただろう。
柊は、手前の部屋で、ティー・テーブルに落ち着き、紅茶のカップを持ち上げていた。目が見えないにも拘わらず、カップは寸分違わず、ソーサーに乗る。
カチャ、と食器の触れ合う音が、した。
「お話しは何でした、お兄さま？　――ああ、ぼくにもお茶を」
ティー・テーブルを囲む椅子の一つに腰を降ろし、司は、傍らに立つ柊の部下に声をかけた。
部下は、文句も言わずにお茶を注ぐ。それを口に含むと、柊がカップを置いて、口を開いた。
「貧血で倒れて、ロード・ウォリックのパーティに行けなかった、だと？　どういうことだ、司？」
抑揚のない、それでも静かとは言えない口調、であった。
「柊様、それは先日もご連絡いたしました通り、司様は忙しい日が続いて体調を――」
「君には訊いていない、ドクター・刃(レン)。たかが家庭医(ホームドクター)の分際で、グ

ループのことに口を挟むな」
「……」
柊の言葉に、刃（レン）は黙って指を結んだ。
「医者が側についていながら、司の健康管理も満足に出来ないとは――。君をどこかから拾って来た父の判断が誤っていた、としか思えん」
「お話しは何でした、お兄さま？」
刃（レン）に対して続く厭味に、司は鋭い視線で問いかけた。もちろん、柊には、凍りつくようなその視線は見えなかっただろう。――いや、見えなくとも、感じていただろうか。
「目が見えないことで一番残念なのは、人々が美しいと言うおまえの面貌を見ることが出来ないことだ、司。今のおまえのその表情も、さぞ美しいことだろう」
と、唇の端を持ち上げる。多分、笑み、なのだろう。
「――確かめて見ますか？」
司は言った。
「残念だが、私が触れるころには、もういつもの無表情な面貌に戻っているだろう。それに、今はおまえに触りたくないほど腹を立てている」
「……」

## Easter ?—4

「ロード・ウォリックのパーティを、たかが貧血で欠席するなど……。おまえには、まだ英国貴族の持つ人脈の重要さが解っていないようだな、司。パブリック・スクール（英国の名門私立中等学校）やオックスブリッジ（オックスフォードとケンブリッジ）、あるいは名門クラブや陸軍連隊（グリーン・ジャケッツ）といった上流階級（ファーストクラス）の付き合いの場で築き上げられた人脈は、ビジネス界で最も役に立つ〝顔〟だ。その〝顔〟を蹴ったことが、どれほどビジネスに影響すると思っている？」

「次のパーティには出席しますよ。今の季節なら、ロンドンのどこでもパーティーは毎夜の如く開かれている。ロード・ウォリックと顔を合わせることも難しくない。二十歳になるまではあなたの管理下にある訳ですから、それまではあなたのやり方に従いますよ――」

そう言った刹那のことであった。ヒュン、と風がうねりを上げ、高い音が空を切った。ほとんど同時に、ビシ、っと激しい衝撃が、司の首筋を掠め飛ぶ。

肌が焼けるような痛みが駆け抜けた。

「くぅ――っ！」

刹那のことに、椅子の上から吹き飛ばされ、司は床に倒れ込んだ。

柊の手には、鋭い革の鞭が、ある。

「あ……ぅ……」

「司様――っ！」

その声を上げたのは、刃（レン）であった。司の傍らに膝を折り、腕に支えて抱き起こす。

司の首筋には、朱の一線が刻まれて、いた。鞭が掠めた傷痕だ。血が滲み、白い肌を赤く染めている。

「大丈夫だ……」

皮膚が焼けるような痛みを堪え、司は指先ですくった首筋の血を、手のひらできつく握り締めた。

「すぐに手当を――」
刃(レン)の言葉は続かなかった。
「大丈夫なら席につけ、司。話はまだ終わってはいない」
柊が、眉一つ動かさずに、淡々と言った。
司は激しい視線で柊を見据え、それでも黙って席についた。
ティー・テーブルの上では、零れた紅茶が、湖にも似た模様を広げている。
「先をどうぞ、お兄さま。十六夜グループの総帥として、取締役の意見は聞きますよ」
その言葉に、ギシ、っと鞭を握り締める音が、した。
「……。プライドだけは、英国貴族以上のようだな。――だが、ロード・ウォリックは、おまえと違って正真正銘の貴族だ。せっかく、子息をおまえに会わせようと、パーティに連れ出されていたというのに――」
「子息？」
柊の口から零れ落ちた言葉を拾い、司は眉を寄せて、顔を上げた。
柊の表情が、サングラスを通して、わずかに、変わる。
「なるほど……。あのパーティは、ぼくと、ロード・ウォリックの子息を妻合(めあ)わせるためのもの、という訳ですか。それではあなたも、ぼくが出席しなくて、さぞ、お困りだったでしょう。ロード・ウォリックも、かなり腹を立てられたことでしょうから――。あなたが、こんな田舎町まで、慌てて駆けつけて来るほどに」
「……」
「生憎、ぼくは結婚などしませんよ。あなたが結婚なさってはどうです、お兄さま？」
「司――っ」
「ぼくはこれで失礼します。――行くぞ、ドク」
刃(レン)を促し、司は席を立って、翻った。
「司！　おまえにその気がなくとも、ロード・ウォリックはその気だ。それに、おまえとロード・ウォリックの子息を妻合わせること

は、お父様が決めていらしたことだ」
「……お父さまが？」
柊の言葉に、司は目を瞠って、振り返った。父、十六夜秀隆の口からは、今まで、一度も聞いたことがない言葉である。
「ああ。――もちろん、お父様がどういう積もりで、おまえとロード・ウォリックの子息を会わせたい、とおっしゃっていたのかは判らないが、ロード・ウォリックにしてみれば、当然、その積もりで会わせたい、という言葉に聞こえただろう。お父様は、ロード・ウォリックの持つ爵位を欲しがり、ロード・ウォリックはお父様の持つ資金を欲しがり――典型的な政略結婚のスタイルだ」
淡々とした口調で、柊は言った。
「……。ぼくには関係ありません」
司は冷ややかに言って、部屋を出た。
まだ何か声が聞こえていたが、構わずドアを締めて、廊下に出る。
二人は、厳しい表情のままで、部屋に戻った。客室（ゲストルーム）から離れた、森を見渡すことの出来る静かな一室である。
刃（レン）が、鞭の傷の手当のためにドラッグ・ケースを取り出す中、司はバルコニーへ出て、森を見ていた。

## Easter ?—5

父、十六夜秀隆が、司とウォリック伯の子息を結婚させる積もりがなかったことは、はっきりしている。司だけでなく、刃(レン)もそれは承知していただろう。完全に、ウォリック伯の一人芝居なのだ。

この国は——ヨーロッパは昔から少しも変わらない。家柄や爵位、伝統、格式……未だそういったものに価値を付け、過去の栄華を誇っている。

「司様、傷の手当を」

森を見つめる背中に、声が届いた。

司はゆっくりと振り返り、何も言わずに部屋へと入った。

血で汚れたシャツを脱ぐと、消毒薬を含んだ脱脂綿が、首筋の血を落とし始める。

男と比べると、筋肉のつき方も、骨格も、何もかもが違っている。肩幅も、腕も、決して男のようには逞しくならず、折れそうなほどに儚い線を結んでいる。

その司の体を診察、治療できるのは、刃(レン)ただ一人であり、他の誰も——兄の柊でさえ、司が〈XX〉であることを知っては、いない。それを知っているのは、失踪した十六夜秀隆と、当人たる司、そして、刃(レン)の三人だけであった。

「おまえが死ねば、ぼくも死ぬ、という訳だ」

「フッ……」

鼻を鳴らすような軽い笑みは、少し視線を伏せて、それでも誇らしげに、部屋に、零れた。

窓からは、緑の風が吹き込んでいた……。

「宜しいのですか、柊様？」
司と刃（レン）が出て行った部屋の中、部下の一人が口を開いた。
「パーティの席でロード・ウォリックに婚約発表をさせてしまえば、手間が掛からなかったものを――。一度社交界に発表してしまえば、後は周りが盛り立ててくれる。あれも、十六夜グループの名を辱めるようなことは出来なかっただろうからな。それが……」
柊は、思い通りに運ばなかった舞台を前に、手の中の鞭を、強く、握った。
「ですが、司様がご結婚なさって、跡継ぎを作られるようなことになっては――」
「跡継ぎ？　結構じゃないか。もう一人の父、秋塚事務次官の元にいる弟たちに、土足で踏み込まれるよりは、余程――。跡継ぎを残して司が死んだ時は、私がその子供の後見人になってやろう。小さな子供では、グループを率いて行けないだろうからな」
「――。まさか、司様を……っ」
「殺す、か？――　ハッ！　私はあれを愛しているよ。たった一人の十六夜の弟だ。――だが、事故に遭うこともあるかも知れん」
「……」
「人間、先のことは解らないさ。突然、お父様が消えてしまったように……。私は目が見えない分、人よりも働く勘で何とか先を覗いて来たが……。あれのことは全く解らん。司のことだけは……」
十一、二年前、十六夜秀隆が、突然、どこかから連れて来た子供――。十六夜は、その子供に、自らの片腕であったドクター・刃（レン）を付け、世界中を飛び回り、ろくに屋敷に置いておくこともせず、自らの側に置いて慈しんでいたのだ。
もちろん、目の見えない柊を連れ回ることも出来ず、そのために十六夜の愛情が、将来を託せる司だけに向いてしまったのも、無理のないことだっただろう。無論、戸籍にはもう一人の父、秋塚がいて、その父の元には、十六夜と秋塚の遺伝子を継ぐ弟たちがいる。
しかし、その弟たちは最早、十六夜にとっては秋塚の息子でしか

あり得ないし、それは政財界では珍しくもない関係だ。
だからこそ、十六夜秀隆は、司を特別な者として可愛がっていたのだ。それこそ、ドクター・刃(レン)以外の者には決して触れさせないほどに……。
あの得体の知れない子供を……。
得体が知れないのは、司だけではない。ドクター・刃(レン)も同じだ。刃(レン)もまた、十六夜秀隆がどこかから拾って来た医者だった。柊がまだ二十歳くらいの頃――今から十四、五年前に――。荒んだ野良犬のような眼をした男だった。
「あの男……医者でも《イースター》には係わっていそうにないな……」
その呟きは、低い笑みと共に、零れて、消えた……。

## Easter ?—6

苔生(むす)す暗い森は、少しひんやりと、時折、差す木洩れ日に、幻想的に、えもいわれぬ心地よさをもたらしてくれる場所であった。

樹木の合間を縫うように馬を進め、クリスは、ふと、馬を止めた。

水音が聞こえたような気がしたのだ。

その方向に、耳を澄ます。

背で一つに束ねるウェーブの掛かった長い金髪が、戦(そよ)ぐ風に、柔らかく、揺れた。

クリストファー・G・グレヴィル。まだ二七、八歳の若い青年である。青碧珠(サファイヤ)のように美しい瞳も、気品高く整った面貌も、巧みな馬術と共に、貴族然とした印象を備えている。

だが、身につけている服は、馬を駆るには相応しくない、高級なスーツである。

「水鳥でもいるのかな」

そう呟き、水音の方へと馬を向ける。

今はもう狩猟の季節でもなく、森はひっそりと静まり返っている。

十一月から四月まで、領地の城に滞在していた貴族たちも、シーズン、と言われるこの季節は、ロンドンのタウン・ハウスで過ごしているのだ。衣を脱ぐように、退屈な領主の館(マナーハウス)を抜け出し、華やかなロンドンで、毎夜の如く、舞踏会を開いている。

もっとも今では、年間を通してロンドンのタウン・ハウスで過ごす貴族の方が、絶対的に多いのだが。

だが、それなら彼——クリスは、何をしにこの森へと入って来たというのだろうか。その服装からしても、狩猟のためとは思えない。

狩猟(ハンティング)は、銃猟(シューティング)とは違って、銃を使わず、犬に獲物を襲わせて、獲物が倒れたら、人間がその獲物を犬から取り上げる、という残酷な遊びで、服装も厳しく、シルクハットにハンティング・タイ、飾り

のないピン、黒のコート、チョッキ、淡い黄色の乗馬ズボン、黒のブーツ、拍車、黄色の手袋……もしくは、白の乗馬ズボンにハンティング・ブーツ――と、他にもさまざまな色や形の決まりがある。

馬術は貴族に取っては欠かせないもので、馬に乗れない貴族など論外であり、そのためのルールも厳しいのだ。

水の音が、近くなった。

ポッカリ、と開けた森の狭間に、黄金色の柔らかい光が差し込んでいる。

湖があるのだ。

陽光が湖面に反射して、きらきら、と光を弾いている。

馬を止め、クリスは樹木の切れ目に、瞳を細めた。

誰かが湖で泳いでいる。まだ初夏だというのに、その水の冷たさも気にしないように。

「……精霊（シィ）？」

幻想的なほどに美しいその姿を前に、クリスは呆然と口の中で呟いた。

白い肢体を惜しげもなくさらし、飛沫を上げるその姿は、ケルトの民の云う水の精（ウンディーネ）のように、妖しげに水に馴染んで、いる。

人間ではない、と思ったのは、その美しさのせいだけではなく、華奢な肢体に初々しく膨らむ白い乳房のせいでもあっただろうか。

一六〇年も前に地球上から姿を消した〈ＸＸ〉の体を持つ者を前にして、クリスには、それが人間であるとは思えなかった。

一六〇年前、Ｙ染色体を持たない女だけが新種の皮膚癌に侵され、地球上から絶滅した。学者たちは、慌ててその癌の原因を探り、それが有害宇宙線と、人間の作り出した突然変異誘発物質によって引き起こされたＤＮＡ障害であることが判った。そして、女たちを有害宇宙線の届かない安全な場所に隔離したが、その新種の癌は恐ろしい速さで転移し、遺伝子治療も追いつかないまま、女は地球上から絶滅した。一度浴びた有害宇宙線は、地下や屋内に潜ってからも、その進行スピードを落とさず、女の体を破壊したのだ。まだ一度も

外へ出たことのない赤ん坊さえ、母親から受け継いだ異常遺伝子のために、癌を発症して、呆気なく死んだ。
そして、この世は、染色体〈XY〉の男だけの世界となり、染色体〈XX〉の女は存在しなくなった。
もちろん、女の姿形をした者は、いる。それは、女が全滅したから、といって現れた特種な者ではなく、女がいた頃から存在していた性転換した男たちであった。彼らはトルソーと呼ばれ、上流階級では、未だ受け入れられてはいないが、中流階級以下では、そう珍しくもなく受け入れられている。――いや、問題はある。彼らは男としての生殖器を捨ててしまうため、子供を造ることが出来ないのだ。
だから、女ではなく、トルソー――胴体だけのマネキン人形――という名で呼ばれている。

## Easter ?—7

今、子供は、全て体外受精になっている。結婚し、子供を作りたいと申し出る二人の生殖細胞を取り出し、培養液の中で分裂させ、その細胞が八個まで増えたところで、互いの胚を四個ずつ取り出し、混合胚を作り、再び培養液に戻すのだ。もちろん、そのままでは、染色体の数が多過ぎるため、キメラになる。

キメラ——。ギリシア神話では、前身を獅子、胴を山羊、そして、大蛇の尾を持ち、口から猛火を吹くという姿で表され、キマイラとも呼ばれている。発生工学では、二種類の生物の胚細胞を混ぜ合わせて発生させた生物を示す。つまり、両親の染色体を半分ずつもらって一つになった子供ではなく、二人分の染色体を一つの体に持つ子供だ。

普通、人間は、一対になった四六本の染色体を持っており、子供は両親の染色体を一組ずつ（二三本づつ）もらって、同じように、合計、四六本の染色体を持つことになるが、キメラは両親の染色体を二組ずつもらうことになってしまい、合計、九六本の染色体を持つことになるのだが、混合胚を作る時に、染色体の半分を取り除くことは、難しくもない。

言い方を変えれば、その遺伝子操作によって、優れた遺伝子の方を優先して残し、天才児を作り出すことも出来るのだ。もちろん、それは社会倫理を逸脱した遺伝子操作であり、個人の価値に関する考え方の基礎を脅かすものとして、ＯＴＡ（連邦テクノロジー・アセスメント局）などによって、厳重に取り締まられている。クローンも、戦略兵器に繋がるとして禁止され、婚姻関係を結んだ二人だけが、子供を作ることを許されていた。

もちろん、愛情を持って婚姻を結ぶ者がほとんどではあるが、上流階級、特に政財界ではそうとは限らない。お互いの利益や後継ぎを得るための婚姻がほとんどで、共に暮らす訳でもなく、必要な子

供が出来れば、あとはそれぞれの元に子供たちを引き取り、育てることになる。こちらの父、あちらの父、というふうに、別の家庭のようになってしまうのだ。
女が全滅し、地球が危機に瀕して以来、世界は遺伝子部門の研究に莫大な資金を注ぎ、その発展にあらゆる労力を注いで来た。そのために、他の部門は、この一六〇年間、ほとんど進歩していない。
日本の十六夜グループも、その遺伝子部門で莫大な富を築き上げ、大財閥として君臨するようになった巨大コンツェルンの一つであった。
「十六夜、か……」
クリスが呟いた時であった。水音が止み、冷たい湖の中から、漆黒に澄んだ東洋の瞳が持ち上がった。
クリスは刹那、ハッ、として、その瞳の威圧感に立ち竦んだ。
白い肢体が湖から上がり、初々しい乳房を隠しもせずに、ただ無表情に、ラフなパーカーを、ぱさり、と羽織る。
たとえようのない美しさであった。その美しさに見惚れていると、
「のぞきが趣味かい？」
怯むほどに冷たい、漆黒の瞳が突き刺さった。
まだ変声期も迎えていない少年のような、心地よい響きの声であった。そして、昨今の貴族よりも、余程、素晴らしい英国英語（クングス・イングリッシュ）だった。
だが、あまりに静かなその声と、皮肉を交えるその口調に、クリスは言葉を返せず、息を呑んだ。
「ぼくは見世物じゃない。――君が消えないのなら、ぼくはこれで失礼するよ」
まだ雫を落とすままの髪で、華奢な肢体が馬の脇を擦り抜ける。
――いや、擦り抜ける時、その馬――クリスの乗る馬を見て、わずかに訝しげに眉を寄せた。が、それも刹那のことで、足を止めることもなく、森の中へと歩いて行く。
「あ、君――っ」

クリスは咄嗟に、その華奢な背中を引き留めていた。馬から降り、黒い瞳が振り返るのを待って、口を開く。
「黙って覗く積もりはなかった。精霊かと思って、声をかけることも出来なかったもので……。私はクリス――クリストファー・グラント。今の失礼は許して欲しい」
と、育ちの良さを示すように、先に名乗る。
「……ぼくは、司。十六夜司」
返って来た名前は、驚愕に値するものであった。
「十六夜……？　日本人？」
と、問い返す。
「ああ。――じゃあ、ぼくは屋敷へ戻るので、これで」
そう言って、華奢な肢体は愛想もなく、樹木の向こうへと紛れて行った。
引き留めることも、出来なかった。
「十六夜……」
十六夜司、といえば、日本の大財閥の総帥の名前である。
「あれが十六夜司？　あの子供が……？」
耳にだけ聞いていたその名の主を前にして、クリスは呆然と呟いた。そして、次には肩を揺らして笑い出した。
「クックッ……。アハハハハ――っ！　あの子供が十六夜司とは――。クックッ……！」
心の底から楽しむようなその笑いは、長く湖に谺していた……。

## Easter ?—8

屋敷へ戻ると、刃(レン)が厳しい顔付きで待っていた。
「何度言えば解るんですかっ、司様！　勝手に出歩かないでください、とあれほど申し上げたはずです。それに、またそんなずぶ濡れの格好で――」
「じゃあ、乾くまで外にいるさ」
プイ、と顔を背け、司は目の前の屋敷から――いや、刃(レン)の前から、翻った。
「少しくらい家にじっとしていられないんですか、あなたは」
「おまえみたいな年寄りじゃないのさ」
「ムッ」
としたものの、刃(レン)はその怒りを呑み込み、
「さっさと髪を乾かして着替えをしてください」
と、憮然と言う。
「着替え？　また柊でも来ているのか？」
訝しげな顔で振り返り、司は眉を寄せて問い返した。
「いえ、ロード・ウォリックのご子息が――。あなたがお出掛けになっていたので、この辺りを一回りしてくると、先程……」
「……。ぼくは会う約束などしていない」
「承知しています。ご結婚なさらないのではなく、ご結婚できないのだということも」
チラ、っと瞳を持ち上げ、刃(レン)は言った。
司の瞳が、それを見据える。静寂の夜のような瞳であった。
「何なら、裸で会ってやろうか？」
と、唇の端を持ち上げる。
刃(レン)は目を見開き、それから、フッ、と鼻を鳴らした。
それ以上何を言うでもなく屋敷に入り、二人は寝室へと足を向けた。

司はシャワーを浴び、刃（レン）は司の着替えを用意する。それから、淡いマーブルのバス・ルームに入り、司がシャワーを浴びる中、刃（レン）は心地よい肌触りのタオルを手に、控えていた。
「お父さまのことは何か判ったのか？」
シャワーを止め、振り返りながら、司は訊いた。
「いえ……。この英国の別荘にも、この一年、お見えになった様子はありません」
雫を纏う司の肩にタオルを掛け、刃（レン）は応えた。
「そうか……。これ以上、英国にいても仕方がないな」
「ロード・ウォリックのことだけは、きちんとなさっておいた方が宜しいかと」
「また貧血で倒れた、と言っておいたらどうだ？　体が弱くて跡継ぎが出来ない、とでも思えば、諦めてくれるだろう」
「……。もう少しご自分のお体のことをお考えください。あれが、今年に入ってまだ二回目の月経ですよ。その前にあったのが一月で――。月経不順のせいで、たまに生理が来ると余計に腹痛や貧血が酷くて――」
「生理が毎月あることの方が耐えられない……」
ポツリ、と呟くように、それでいてきつい瞳で、司は言った。
「――司様」
「腹痛、頭痛、吐き気、倦怠感……それは薬でどうにでもなっても、生理が終わる訳じゃない。あの七日間は地獄だよ」
「……」
「お父さまの頼みでもなければ、誰がこんな体のままでいるもんか。さっさとおまえに卵巣を抉り出してもらっているさ」
吐息さえ霧氷と化してしまうような言葉、であった。
女の体がどれほどの苦痛に耐えられるように出来ているのかは判らないが、それは決して、男には知ることが出来ないものであっただろう。男よりも小さく、弱々しい体で、女は男以上の苦痛と係わって生きて行かなくてはならないのだ。

一六〇年前の男たちは、女がそうして苦しみながら生きている様を、平気な顔で見ていることが出来たのであろうか。

代われるものなら代わってやりたい、と思ったことはなかったのだろうか。

少なくとも刃（レン）は、司の苦痛から目を逸らしたい、と思ったことが、あった。そして、それは一度や二度では、ない。

あの時も……。

## Easter ?—9

昨夜から気分が優れない、ということで、その日、十四歳の司は、朝からベッドを出ずに過ごしていた。

下腹部の鈍痛、頭痛、倦怠感、胃の痛み……さまざまな症状を刃(レン)に訴え、気が滅入ったように寝転がっていたのだ。それは、刃(レン)が健康管理を続ける中、初めてのことであり、また、原因も判らず、安易に薬を処方することも出来ず、司も我慢出来ない痛みではない、ということで、しばらくそのまま様子を見ることになっていた。

「お食事は——」

「要らない。食べたくないんだ……」

けだるげにベッドに寝返りを打ち、司は言った。苦痛よりも、苛立ち、というもののほうが多く見える言葉であった。

ヒステリー、とでも言うのだろうか。ギリシア語で《子宮》を意味する言葉、ヒステロンから来ている、というその病気が、女だけのものではなく、男にもある、ということは、今では誰もが知っている。フロイトが発表した当時は、誰も相手にせず、それどころか、子宮のない男にヒステリーがあるものか、と馬鹿にされた病であったにも拘わらず。

心が身体に障害を及ぼす、とでも言えばいいのだろうか。今の司の症状は、取り立ててどこが悪いという訳でもないのに、それでも痛みを訴える、神経症にも、似ていた。

「せめて、フルーツだけでも」

そう言って、刃(レン)が、繊細に盛り合わせたフルーツの皿を、司の前に差し出した時だった。

「要らないと言ってるだろっ！」

司がその皿を煩わしげに、叩き、落とした。

いつも冷静沈着で、何事にもさして動じない司の行為であっただけに、その変化は、刃(レン)に不安をもたらした。

「……司様？」
刃（レン）は、不安のままに、その名前を呼びかけた。
だが、司はシーツに包まり、背中を丸めて黙っている。
しばらく沈黙が続いた後、だっただろうか。
「く……っ」
圧し殺すような声が、シーツの中から零れ、落ちた。走った痛みを堪えるような呻きであった。
「司様？」
刃（レン）は、その様子を見て、問いかけた。
「何でもない……。言っても、どうせ、原因も何も判らないんだろ……」
薄い言葉が返って来る。いつもの司なら、そんな言葉は返さなかっただろう。
不安、なのだ。刃（レン）よりも、当人たる司の方が、余程、不安がっている。
女の体に関する文献はたくさんあるとはいえ、今現在、この地球上に存在している女は、司ただ一人、なのだ。誰が女の体のことを教えてくれる、という訳でもなく、その苦しみを共にするものも、いない。ただ本を読んで覚えるだけの毎日だ。
「もう一度、診察を……」
刃（レン）が言うと、ゆっくりとではあるが、司は素直に仰向けになり、シーツを剥いで天蓋を見上げた。
「失礼します」
パジャマのボタンを外すと、初々しく膨らんだ乳房が零れ落ちる。
「痛みは、先程と同じ胃と下腹部ですか？」
「ああ……。腹痛が酷くなってる……」
刃（レン）や、司の父、十六夜秀隆が一番案じていたのは、司が癌を発病するかも知れない、ということであった。一五〇年以上前に、〈XX〉を絶滅させてしまった、あの新種の癌だ。今は、あの時とは違って、有害宇宙線と突然変異誘発物質が結び付いている、というこ

とはないが、毎日、紫外線を浴び、毎夜、宇宙線を浴びている、ということは同じである。もちろん、その癌発生に対する遺伝子治療も、十六夜グループが研究して来たものの一つだが、それは飽くまで理論上のことで、実際に癌を発病した〈ＸＸ〉に治療を施したことは、一度も、ない。〈ＸＸ〉はすでに絶滅しているのだ。司一人を除いて……。

「この辺りですか？」

下腹部を押すと、司が色薄い唇を、きつく、結んだ。

一五〇年前も、原因が判らないままに、どんどん癌が転移、進行し、為す術もないまま、〈ＸＸ〉は全滅した。今、また、司が原因不明の痛みを訴えている、ということは、その懸念を持ち出すのに充分なものであった。

「もういい。シャワーを浴びれば少しはすっきりするさ」

埒の明かない診察に、体のけだるさだけでも取り払おうとするように、司がベッドの上に体を起こした。

シーツを染める朱い染みが目についたのは、その時であった。

## Easter ?—10

血だ。

「……司様、どこか怪我を？」

刃（レン）は、その血を見て、問いかけた。

「怪我？　《柊の鞭》以外にかい？」

司は皮肉げな口調で、問い返した。

「血が……」

その言葉に、司の視線も、シーツに、落ちた。

漆黒の瞳が、オーディンの騎行たる吹雪を見たように、厳しく凍った。途端に、司の面は蒼白になっていた。

まだ、司も刃（レン）も、それが初潮であるとは気づいていなかったのだ。初潮というものがどんな形で訪れるのかも、これほど劇的に、はっきりとした形で訪れるものだ、ということも、少しも知ってはいなかった。ただ、突然の出血に、不安と驚愕に囚われていただけだったのだ。

これほど鮮明に、その体が思春期にあることを告げるものが、他にあっただろうか。胸にしても、腰の丸みにしても、いつからか判らない形で、ゆっくり、ゆっくり、変化して来たのだ。

そして、刃（レン）も、司が十二、三歳の頃は、初潮のことも気に掛けていたが、日が経つに連れ、知識の片隅に留めるだけとなり、いつしか思い出さなくなっていた。その矢先のことであったのだ。

その出血が初潮であり、腹痛や他の症状もそのためのものであると判ったのは、出血箇所を確かめてからのことであった。

病気ではない、と知り、刃（レン）は、ホッ、と表情を緩めた。

「おめでとうございます、司様。十六夜会長も、さぞお喜びになることでしょう。初潮がないことをずっと心配しておいででしたから……。もちろん、初潮があってもすぐに子供が出来る、という訳ではなく、二、三年は不妊の時期が続く、ということですが、十六夜

会長は司様のお子様を楽しみに――」
「楽しみだと？　おめでとう、だと？　これはぼくの体だ」
刃（レン）の言葉をきつい視線で睨みつけ、司は蒼冷めた唇を震わせた。
「……司様？」
「痛い思いをするのは、このぼくだ。この血はぼくの体の中から流れるものだ。その体に不自由するのも全て、ぼくだ。――おまえは何をする、というんだ？　おとうさまが何をしてくれる、というんだ？　ぼくの痛みを肩代わりしてくれるというのか？　ぼくと同じ思いを味わってくれるというのか？」
「……」
何が言えた、というのだろうか。不安と怒りをぶちまける司の言葉に、刃（レン）は何も言えずに、立ち尽くしていた。
「こんな体なんか、いらない……。もうこんな体なんか嫌だ……。こんな体なんか……」
「司様――」
「こんな体なんか嫌だあああああ――――――っ！」
狂ってしまったのではないか、と思えるほどの絶叫てあった。ただ一人、神秘的な体を持つ女として、彼がどれほどそれを不安がり、また、恐れていたのかなど、刃（レン）も、十六夜秀隆も、少しも解ってはいなかったのだ。自分の体が変化し、乳房が膨らみ始め、腰が丸みを帯び始め、そうする中、司がどれほど追い詰められて行ったのかなど、理解しようともしていなかった。
一五〇年前の文献の通りに成長して行く司の体を見ることばかりに喜びを見いだし、自分の体が変わって行くことに対して為す術もない司の不安など、刃（レン）は、多分、一度も考えたことはなかった。医者として、特別なものを見ることが出来る自分を、誇らしくさえ思っていたのだ。
「私がお護りします……」
刃（レン）は言った。
頭を抱え込む司の肩が、わずかに、揺れた。

ベッドに埋める顔が、少し、持ち上がる。
「必ず、私が――」
「笑わせるな。――護るだと？　たかが医者のくせに大きな口を叩くな」
鋭い視線が突き刺さった。司は、脅えながら牙を剥く手負いの獣のように、激しく刃（レン）を見据えていた。

## Easter ?—11

「……。あなたがその体に耐えられなくなった時、お護り出来るのは私だけです。私は……確かに十六夜会長に恩があり、女性としてのあなたの体を護るよう言い付かっておりますが、あなたがその女性の体に耐えられなくなった時は、たとえ、十六夜会長の命に背くことになろうと、あなたの命に従います……」

部屋の空気が、その流れをも止めるように、静かに、なった。

十六夜秀隆の命に背いても——。その刃の言葉に嘘は、なかっただろう。あまりにも不憫で、痛々しい司の姿を前にした時、刃は確かにそう思ったのだ。自分が学者ではなく、司の主治医である、ということを思い出した、と言ってもいい。世界の神秘を護っているのではなく、一人の人間を護っているのだと……。

これ以上、司の苦しみを正視することが出来なかったのだ。

司は何も言わなかった。——いや、少しして、強かな瞳を持ち上げ、こう言った。

「おまえのことは、ぼくが護る。おまえが軍の命令に背いて医者を辞めた時、おとうさまが、軍に追われるおまえを助けたように、おまえがおとうさまの命に背いた時は、ぼくが——。今度はぼくが、おまえを護る」

不敵な言葉と、瞳だった。

どこの誰が、彼ほど強くなれる、というのだろうか。

もし、彼が男であっても、これほど強くなることが出来ただろうか。

「……ありがとうございます」

唇の端を少し持ち上げ、刃は、フッ、と鼻を鳴らした……。

ドアにノックが届いたのは、司が髪を乾かし、着替えを済ませた時だった。
「会長、ロード・ウォリックの御子息がお戻りになりました」
蝶ネクタイを結ぶ使用人が、招かれざる客の再訪を、告げた。
司にとっては、顔どころか、名前も知らない婚約者である。
「さあて、どんな男だか」
別段、関心も無げに、そして、気負いもせずにそう呟き、司は刄(レン)の広げる上着に腕を通して、部屋を出た。
仕立ての良いスーツが、華奢な肢体を美しく、彩る。
刄(レン)も、司の後に続いて廊下を渡り、絨毯を敷き詰めた階段を、ホールへと降りた。
古き良き時代には、あらゆる生活の中心だったというホールも、時代の流れと共に価値を変え、よりプライベートな空間が好まれるようになった頃から、親しい客との語らいの場はホールから寝室に移り、ホールよりも小規模なダイニングが設けられるようになり、と、今ではすっかり、パーティのためだけの空間と化している。
ウォリック伯の子息も、ホールではなく、サロンの方へと通されていた。
壁に掛かる何枚もの肖像画や、きらめくシャンデリア、見事なマントルピースに彩られる暖炉や、趣のある家具調度……住む人間を偲ばせる、格調高い一室だ。
そこに、ウェーブの掛かった長い金髪を、背で一つに束ねる青年が、いた。青碧珠の瞳も、気品高い面貌も、司には見覚えのあるものであった。
「先程は失礼を、ミスター・司・十六夜。改めて、クリストファー・グレヴィルです」
優雅な物腰と、少しからかいを含めるような仕草で、湖で逢った青年――クリスは言った。
そのクリスを前にして驚いたのは、司だけではなかった。刄(レン)もま

た、同じである。
「司様、彼……クリストファー様とは、もうお会いに？」
と、戸惑いながら、問いかける。
口を開いたのは、クリスであった。
「ああ。さっき、君に馬を借りて時間つぶしをしていた時に、ね。クス……。私の婚約者が、こんな愛らしい精霊だったとは知らなかった」
と、含み笑いを挟んで、司を見つめる。
司の表情が、きつく、変わった。
「掛けさせてもらってもいいかな？」
「……どうぞ」
クリスが椅子に腰掛けるのを見て、司もその向かいの席に、腰を下ろした。
刃（レン）は、ドアを閉じて、その場に控えていた。
「先日は、パーティを欠席して失礼を」
口火を切ったのは、司であった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1928ba/

---

イースター

2012年1月14日14時50分発行